

和歌山と移民

海外へ移住した先人の歴史



参考文献

- 海外日系人協会 (2015) 『連れもていこら紀州から! :世界にひろがる和歌山移民』
- 『近代日本移民の歴史』編集委員会編 (2016)
- 『近代日本移民の歴史2 北アメリカ~ハワイ・西海岸』
- (2016) 『近代日本移民の歴史3 太平洋~南洋諸島・オーストラリア』
- 国際協力事業団 (1994) 『海外移住統計 (昭和27年~平成5年度)』
- 在亜日系団体連合会編 (2002)
- 『アルゼンチン日本人移民史』アルゼンチン日本人移民史編集委員会
- 篠達和子・フランクリン王堂 (1885-1924)
- 『図説ハワイ日本人史』B.P.ビショップ博物館出版局
- 日墨協会 (2016) 『はるばるきたぜメキシコ』
- 藤崎康夫編 (1997)
- 『日本人移民 4 アジア・オセアニア』日本図書センター
- 和歌山県 (1957) 『和歌山県移民史』
- 和歌山大学紀州経済史文化史研究所編 (2014)
- 『移民と和歌山:先人の軌跡をたどって』
- 和歌山大学紀州経済史文化史研究所編 (2016)
- 『移民の仕事とくらし:アメリカ、カナダ、ブラジル、オーストラリア』

お問い合わせ

和歌山県企画部企画政策局国際課
TEL:073-441-2055 E-mail:e0223001@pref.wakayama.lg.jp

和歌山県人会インタビュー動画

海の向こうの和歌山

移民の歴史・海外に移住した先人たちの現地での生活や地域への貢献について、専門家の解説や県人会員のインタビューを交えて紹介

詳しくはこちら▼

海の向こうの和歌山



和歌山と移民

海外へ移住した先人の歴史

和歌山が、全国有数の移民を送り出した県であることを、知っていますか。

日本からの集団的移民は明治期に遡ります。

多くの県民が、アメリカ、カナダ、オーストラリア、ブラジルなどへ仕事を求めて海を渡り、有数の移民輩出県と称されています。

海外には、南北アメリカを中心に、いくつもの和歌山県人会があり、中には、100年を超える歴史をもつ会もあります。

全国第6位の移民県

ー和歌山県からの移住者数ー

和歌山県からの海外移住者数は、第二次世界大戦前がおおよそ31,000人、戦後がおおよそ2,000人で、広島、沖縄、熊本、山口、福岡について第6位です(『海外移住統計(国際協力事業団・1994年発行)』より)。日本最初の公式な移民は、1885年(明治18)の第一回ハワイ*官約移民で、953人の移民のうち、22人が和歌山県人でした。

※官約移民

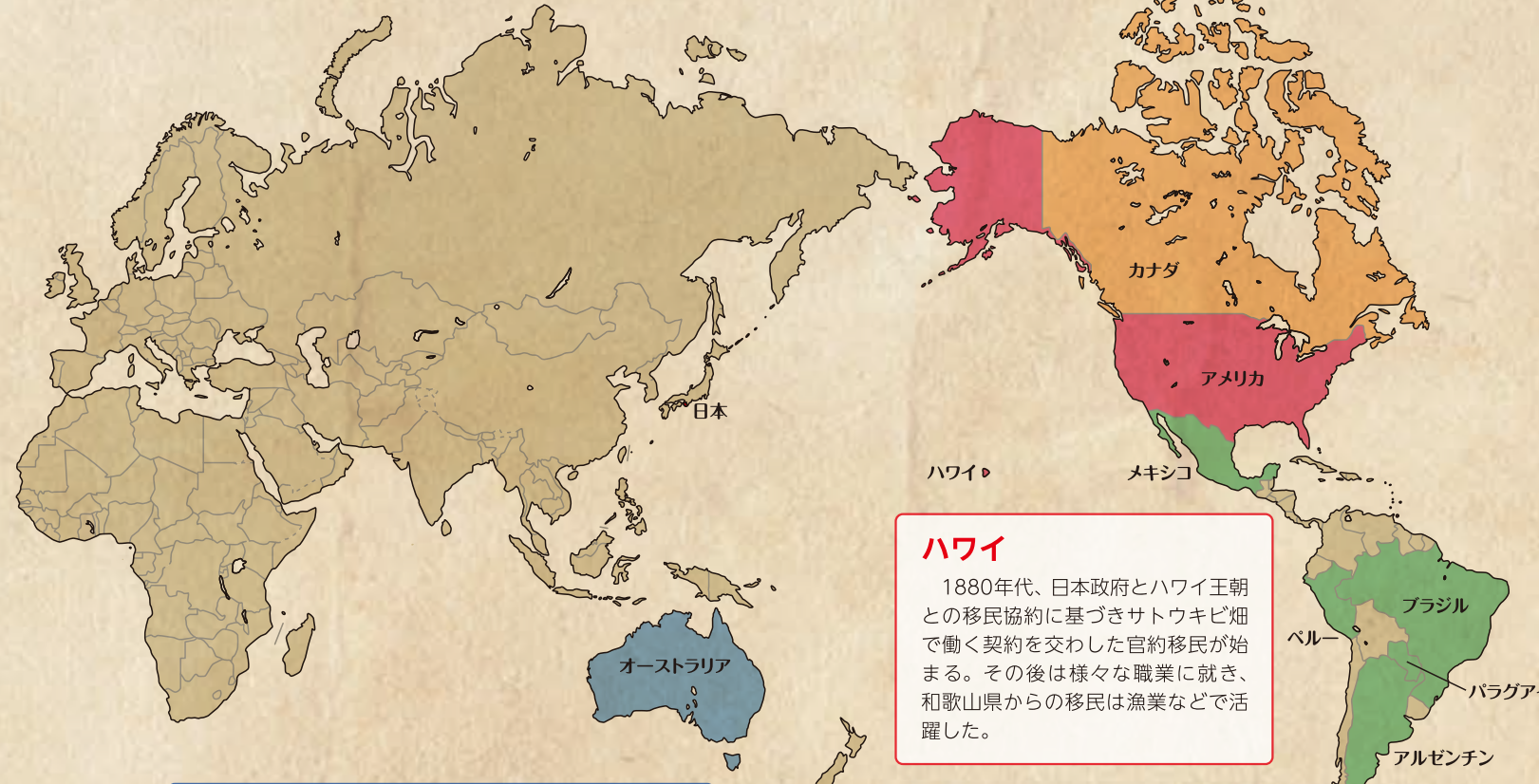
ハワイ王国からの依頼でハワイ政府と日本政府との間に条約が結ばれ、日本からハワイへ移民が送り出されました。この政府間条約によってハワイに渡った日本人移民を「官約移民」といいます。

故郷への送金

和歌山から世界各地へ移民した人たちの多くは、移住先での永住ではなく、出稼ぎを目的としていました。稼いだお金の多くを、故郷へ送金していたのです。家族や親戚はもちろん、出身地の学校や寺、神社などへも送金されていて、故郷の暮らしを支えていました。

和歌山県出身の移民からの送金額は、大正末期まで、全国一位であったといわれています。

(『和歌山県移民史』より)



加奈陀(カナダ)三尾村人会
カナダ移民資料館蔵(データ提供:和歌山大学・紀州経済史文化史研究所)

カナダ
1880年代後半から、ブリティッシュコロンビア州での鮭漁に従事する人々の移民が始まる。漁業従事者の大半が和歌山県三尾村(現日高郡美浜町三尾)出身者で占められ「加奈陀三尾村人会」が結成された。

アメリカ
1890年代以降、ハワイより賃金が高く、開拓途上で移民を歓迎したカリフォルニアなどへの移住が増加し、農業、鉄道、鉱山、漁業、商工業などに従事。日本人が多く住んでいた地域には、コミュニティが形成された。



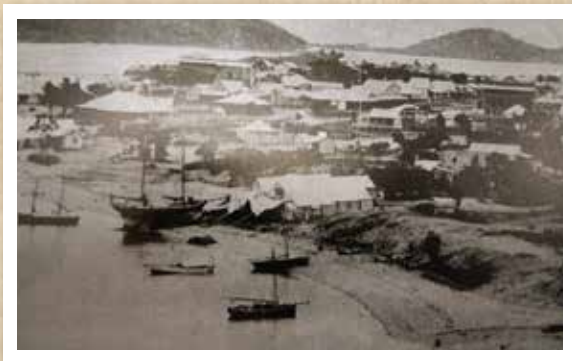
ターミナル島の缶詰工場の借家と当時のツナ缶(アメリカ)
太地町歴史資料室蔵(データ提供:和歌山大学・紀州経済史文化史研究所)

ブラジル
1908年、笠戸丸での渡航により日本からブラジルへの移民が始まる。多くの人々はコーヒー農園等での労働に従事した。戦後の食糧難・就職難や、1953年に発生した大水害を背景に和歌山県から多くの人々が移民した。



広大な珈琲農園(ブラジル)
和歌山市民図書館蔵(海外興業株式会社『ブラジル移民地写真帳』)

オーストラリア
高級ボタンの材料とされた白蝶貝採取のため1880年代からオーストラリア北岸に位置するダーウィン、ブルーム、木曜島への移民が始まる。木曜島で採貝労働に従事する日本人は、全労働者の6割に達した。



木曜島の港風景(1910)(オーストラリア)
和歌山市民図書館蔵(藤崎康夫編『日本人移民4 アジア・オセアニア』)

ハワイ
1880年代、日本政府とハワイ王朝との移民協約に基づきサトウキビ畑で働く契約を交わした官約移民が始まる。その後は様々な職業に就き、和歌山県からの移民は漁業などで活躍した。



サトウキビ農場での作業(ハワイ)
和歌山市民図書館蔵(篠達和子・フランクリン王堂『図説ハワイ日本人史』)

ペルー・アルゼンチン・パラグアイ
ペルーへの移民は1899年に始まり、初期にはサトウキビ農場での労働に従事した。アルゼンチンへは、日本からの渡航者以外に、ブラジルなどからの転住者が多く渡った。パラグアイへの移民開始は1936年と新しく、和歌山県出身者が移民の受け入れや新しい移住地の立ち上げに貢献した。



日本人初の移住地ラ・コルメナはブドウ酒で有名(パラグアイ)
JICA横浜海外移住資料館蔵

メキシコ
元外務大臣榎本武揚が、1897年に自ら設立した移民会社によりメキシコへの移民が始まる。1935年にはシナロア州に移住した和歌山県人による県人会が設立された。



墨国和歌山県人会メンバー(1936)
寺本就一氏蔵



和歌山市民図書館蔵(海外興業株式会社『ブラジル移民地写真帳』)

ブラジルへの移民

ブラジルへ降り立った和歌山県人

19世紀末頃から多くの日本人がアメリカへ渡りましたが、20世紀初めごろになると、様々な形で移民が制限されるようになります。その中で、新しい移民先としてブラジルが注目され、1908年、日本からブラジルへの移民が始まりました。和歌山県人は、それから数年後の1910年代、大正初期にブラジルへ移民したとされています。

船で神戸港を出発し、アフリカ大陸最南端の喜望峰を経由し、およそ2か月かけて、ブラジル・サンパウロ州の港町、サントスへ到着しました。移民列車でサンパウロ市へ向かい、移民収容所で数日を過ごした後、内陸にある複数のコーヒー農園へと向かいました。

最初の数年は、コーヒーの不作などもあり思うようには稼げませんでした。また、農園の待遇も悪く、用意された家が家具や床板もない掘立小屋であったり、まるで奴隷のように監視された状態での労働を強いられたりしたため、ストライキや脱走が多発しました。1908年、第1回の日本移民781名のうち、1年後コーヒー農園へ残ったのは、わずか191名であったと言われています。

それでも、数年経過すると、農作業にも慣れて収入が安定し、日本に残した家族にも送金できるようになってきました。すると、より大きな利益を得るために、土地を買い、あるいは借りて開拓し、自営農業をはじめの人が出てきました。

開拓には大変な苦勞が伴いました。自らの手で家を建て、井戸を掘り、原始林を切り開かなければなりません。マラリアの蔓延、更にはイナゴの大群による食害、大干ばつなどの災害に見舞われた入植地もありました。

和歌山県人をはじめ、日本からの移民は、互いに助け合いながらこれらの苦勞を乗り越えていきました。



和歌山市民図書館蔵
〔竹下増次郎編『在伯同胞活動実況 大写真帖』〕

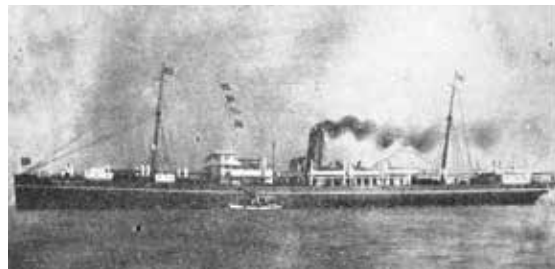
国立移民収容所

1928年、政府の移民奨励策によって神戸に開設された施設。出港までに、講話や予防接種などを受けるなどして、移住の準備をしました。

現在は、「海外移住と文化の交流センター」として、海外移住の歴史を伝える役割を担っています。



スマン着到ニ港「ストンサ」ヲ日餘十六經ヲ港諸南坡嘉新ヲカ戸神運千二萬一約ハ監爾西刺伯ヲカ本日
和歌山市民図書館蔵（海外興業株式会社「ブラジル移植地写真帳」）



和歌山市民図書館蔵（内山勝男編『日本移民五十年記念 かざと丸』
日本移民五十年祭委員会）

笠戸丸

1908年、第1回目のブラジル移民船として、781名の移民を乗せ、神戸港からサントスまで航海しました。ブラジルの日系人にとって、笠戸丸は、移民史の始まりを象徴する存在です。

南アフリカ最南端の喜望峰を超えてブラジルへ



初代在伯(ブラジル)和歌山県人会の会長

竹中儀助と和歌山県人会

1889年に西牟婁郡東富田村(現在の白浜町)に生まれ、1915年に満州に渡った後、1929年にブラジルへ移民しました。貿易会社で働きだすと、誠意と真面目さで信用を築き、農機具や肥料を扱う商社「竹中商店」を立ち上げて成功をおさめます。

1953年に和歌山県が死者・行方不明者1,000人を超える大水害を被った際、被害にあった人々を救済する目的で和歌山県人のブラジル受け入れを計画し、和歌山県と協力して「和歌山不動産株式会社」を設立します。彼を頼ってブラジルへ渡った人々を温かく迎え、親身になって就職の世話や経営指導を行いました。また、在伯(ブラジル)和歌山県人会の初代会長として、移民のために尽力しました。



移民の父

松原安太郎と「松原計画」



1892年に日高郡岩代村(現在のみなべ町)に生まれた松原安太郎は、1918年に長崎からブラジルへ渡ると、通訳業務などに従事しながら綿花栽培を始め、大農場主として成功をおさめます。

第二次世界大戦時、ブラジルは連合国に加わり日本と国交を断絶したため、日本からの移民は途絶えていました。戦後、戦地から多くの人が引き揚げてきたことなどによって日本は食糧難、就職難の危機に陥っていました。

この窮状をみた松原は、個人的に親しくしていた当時のヴァルガス・ブラジル大統領の助力もあり、日本人4千家族、2万人をブラジルのマット・グロソ州(現在の南マット・グロソ州)ドラードス植民地(松原移住地)へ移民させる「松原計画」を、ブラジル政府に認めさせます。

この計画は、ヴァルガス大統領の急死や移民者の脱走等、色々な問題がありうまくはいきませんでした。日本政府が後を継いで、戦後約6万人の日本人がブラジルへ移民しました。松原はその功績から「移民の父」と呼ばれています。



松原移住地の子どもたち 迫間脩氏蔵

サンパウロ州の隣、マット・グロソ州(現在の南マット・グロソ州)ドラードス市近くに、松原安太郎が拓いた入植地。1953年に戦後初めての移民が入植しました。入植当初、ドラードス市からの道は半分が原始林であり、移民たちは、自らの手で道を切り拓かねばなりませんでした。

大霜やマラリアなどの問題が発生し、脱走者も出るなど、開拓には大きな苦勞と犠牲が伴いました。

メキシコへの移民

1897年、元外務大臣の榎本武揚は、自ら設立した移民会社と契約した28名とともにメキシコへ渡りました。これは、中南米への最初の日本人移民でした。榎本移民と呼ばれるこの試みは、資金不足などで移住者の逃亡が続出し、計画通りには進みませんでした。残った人々は同地で「日墨協働会社」を設立し、商店や農場、野菜園など多岐にわたって事業を展開しました。1905年にはアメリカ大陸で最初の日系人学校を設立し、また、西和辞典を発行するなど教育にも力を入れました。会社は1910年に発生したメキシコ革命の影響を受け1920年に解散しました。

和歌山県からも多くの人々が移民し、1935年には、シナロア州に移住した和歌山県人による「和歌山県人会シナロア」を設立。1944年に和歌山県出身者が中心となり「中央学園」という日本語学校を開設するなど、メキシコの日系社会で活躍しました。

ペルーへの移民

ペルーへの移民は1899年に始まりました。ブラジルよりも9年早く、南米で労働契約を結んで渡った最初の移民と言われています。和歌山県人も1908年に初めてペルーへ渡っています。初期の移民はサトウキビ農場や製糖工場と契約して働きましたが、契約が誠実に履行されないなどの問題があり、雇用主と移民たちの間で騒動が発生しました。外務省の介入などで騒動が収まると待遇は改善され、日本全体で10年間の間に12回、計6,000名を超える人々がペルーへ渡りました。



日系人の経営する雑貨店「カルロス千代照平岡」
ペルー日本人移住史料館
Museo de la Inmigración Japonesa al Perú
"Carlos Chiyoteru Hiraoka"

また、資金を貯めて、契約終了後に都市部へ移り、理髪店や雑貨店などを営む人も出てきました。



日系人の経営する宝飾品店 寺本就一氏蔵



アルゼンチンの移住地
JICA横浜海外移住資料館蔵

アルゼンチン・パラグアイへの移民

日本人のアルゼンチン移民は、ブラジルのような集団での労働契約に基づくものではなく、隣国から、より良い環境を求めて転住し、そこから親戚や知人を呼び寄せるような形で始まりました。初期の移民たちは、プエノスアイレスにある製鉄工場や製糖工場で働いたほか、各家庭で料理人や掃除夫として働きました。1930年代になると、洗濯店、喫茶店、郊外での花卉栽培が増加しました。この3業種は、戦前のアルゼンチンでの日本移民たちの代表的な職業でした。

パラグアイへの最初の移民は1936年と比較的新しい時期です。初期の移民の一人である和歌山県出身の石橋亘治は、1936年にパラグアイへ渡ると、農業に従事して成功します。その後、後進のパラグアイ移民を推し進め、1954年から3年間で計13家族を入植させました。また、日芭拓殖組合を組織してエンカルナシオン近くに新たにチャベス移住地を立ち上げるなど、パラグアイにおける日系移民の発展に尽力しました。

ハワイへの移民

1885年、日本政府とハワイ王朝間で締結された協定に基づき、和歌山県人22名を含む953名が日本最初の公式移民(官約移民)としてハワイへ渡りました。当初はサトウキビ畑で3年間働く契約内容でしたが、1898年にハワイ王国がアメリカに併合されて以降、仕事を自由に選択できるようになりました。

このころから、串本、特に田並から多くの移民がハワイへ渡り、ハワイの人々がもともと行っていた疑似餌を使用する漁法を改良した※ケンケン漁で大きな成果をあげました。1924年にハワイの日本領事館が行った調査では、オアフ島全漁師の内38%が和歌山県出身者でした。(和歌山県移民史より)

※ケンケン漁
疑似餌を引きながら船を走らせ、魚をおびき寄せて吊り上げる一本釣り漁法。



日本人の住んだ集落と宿舎
和歌山市民図書館蔵(篠遠和子・フランクリン王堂『図説ハワイ日本人史』)



田並出身者の進水式 ホノルル 大正初期
雑賀徹也氏蔵(データ提供: JICA 横浜海外移住資料館)

アメリカへの移民

那賀地方からは、福沢諭吉に学んだ本多和一郎が開いた私塾「共修学舎」の渡米相談所やキリスト教宣教師たちの影響で、1880年代中ごろから多くの人々が渡米しました。19世紀末から20世紀初頭にかけては開拓の途上であったカリフォルニアなどへの渡航者が次第に増え、紀南地方からも多くの人々が渡りました。移住者たちは、サンフランシスコ、ロサンゼルスを中心に、トマトや、レタスなどの農業、菊やバラなどの花卉栽培、美術商や文具店など、多岐にわたる職業について活動しました。

1900年代初頭から、ロサンゼルス港の一角にあったターミナルアイランドと呼ばれる島には、3,000人もの日系人が暮らしていました。その大半は和歌山県出身者とそこで生まれた2世であり、男性は漁に従事し、女性は缶詰工場で働きました。



ターミナル島の日系人漁師たち
太地町歴史資料室蔵
(データ提供: 和歌山大学・紀州経済史文化史研究所)

南加和歌山県人会の初代会長



湯浅銀之助

那賀郡荒見村(現:紀の川市)出身で、1890年にみかん輸出のため渡米し、サクラメントで果樹園の仕事に従事しました。1897年に雑誌『新日本』を、1902年には新聞『羅府日米』を創刊しました。南カリフォルニア在留日本人のリーダーで、南加和歌山県人会初代会長を務めました。

レタスなどの栽培で成功



南弥右衛門

1905年にハワイを経てサンフランシスコへ渡り、レタスなどの栽培で成功をおさめます。シカゴや遠くニューヨークなどへも出荷し、「レタス王」と呼ばれました。故郷の発展のために江住村(現在のすさみ町)の小学校等に多くの寄付をし、今も建物が残る江住中学校体育館も弥右衛門の寄付により建設されました。

和田フレッド勇

—東京にオリンピックを招致した日系人—



ワシントン州で生まれた日系二世で、第二次世界大戦後、スーパーマーケットの経営で成功をおさめます。1958年、日本政府から依頼されて東京オリンピック招致委員会の委員に就任すると、中南米諸国のIOC委員を活発に訪問して協力要請を行い、東京でのオリンピック開催に大きく貢献しました。

カナダへの移民

1888年、現在の日高郡美浜町三尾にあった三尾村出身の工野儀兵衛はカナダのブリティッシュコロンビア州へ渡り、そこでサケ漁に将来性を見出して三尾村から人々を呼び寄せました。サケ漁の中心地であるスティープストーンには、1900年に加奈陀三尾村人会も設立されました。

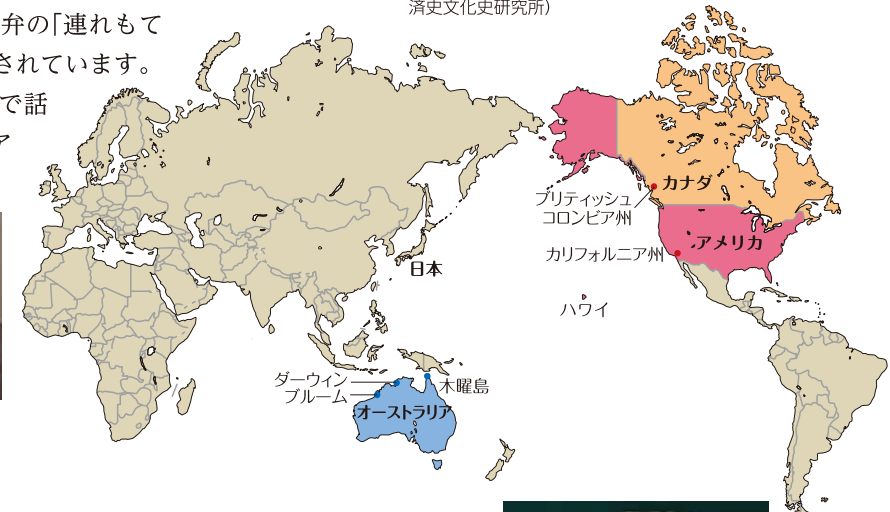
明治初期ごろ、ブリティッシュコロンビア州の漁業従事者の大半を和歌山県人が占め、その中でも三尾村の出身者が中心を担っていたことから「カナダの三尾村」と呼ばれていました。彼らの間では、和歌山弁の「連れもていこら(一緒に行こう)」という言葉が流行したとされています。

カナダから帰国した人々は英語交じりの言葉で話し、西洋様式の生活を持ち帰り、三尾村は通称「アメリカ村」と呼ばれる裕福な村になりました。

工野儀兵衛は、人々のカナダ移民に尽力するとともに小学校の建築費用を送金するなど、三尾村の繁栄とカナダのサケ漁業発展に貢献し、「カナダ移民の父」と呼ばれています。



工野儀兵衛



大量に水揚げされた魚 1908年(明治41)
カナダ移民資料館蔵(データ提供: 和歌山大学・紀州経済史文化史研究所)

オーストラリア編

オーストラリアへの移民

オーストラリアへ渡った日本人移民の目的は、高級ボタンの原材料であった白蝶貝の採取でした。1880年代に始まり、オーストラリア北岸のブルームや木曜島、ダーウィンといった地域にわたって白蝶貝の採取を行いました。1897年、木曜島で白蝶貝採取にかかわる日本人は全従事者1,500人の6割に当たる900人に達し、その内8割は和歌山県人であったといわれています。中でも紀南の出身者が多く、優秀なダイバーとして活躍しました。

危険なダイバーの仕事

ダイバーの仕事には、潜水病や鮫など、様々な危険が伴い、多くの日本人ダイバーが命を落としました。初期のダイビングスーツは、船上から送風パイプを通じてダイバーに空気を送っていたため、窒息による事故も絶えなかったといわれています。

ブルームにある日本人墓地には、700基以上の墓石があり、また、串本町やすさみ町には、オーストラリアでの白蝶貝採取に携わり亡くなった人々の慰霊碑、記念碑が建立されています。



浮上したダイバー
太地町歴史資料室蔵(データ提供: 和歌山大学・紀州経済史文化史研究所)



穴が開いた真珠貝
太地町歴史資料室蔵
(データ提供: 和歌山大学・紀州経済史文化史研究所)

現地日本人会のリーダー

村上安吉

1897年、16歳でオーストラリアに渡ると、写真師や商人として活躍し、現地日本人会のリーダーを務めました。潜水病でなくなるダイバーを救うため、旧式の潜水服を改良し、より簡易で安全な呼吸装置を発明した他、白蝶貝の養殖研究にも取り組みました。

第二次世界対戦と日系移民

1941年12月に日米が開戦すると、アメリカ政府は、翌年2月までに2,000人を超える日本国籍保持者を強制収容しました。さらに同年の8月までに、強制収容は、アメリカの市民権を持つ人も含め、10万人以上の日系人に及びました。

カナダでは、1942年に西海岸に位置するブリティッシュコロンビア州に住んでいた日系人が内陸部への強制移動を命じられ、これを拒否すると捕虜収容所に強制収容されました。オーストラリアでも、1,100人以上の日系人が3か所の収容所へ強制収容され、終戦後は日本へ強制送還されました。

アルゼンチンとチリを除く中南米諸国も、日米開戦後の1942年に日本との国交を断絶し、収容所への強制収容や大都市への強制移動などが行われました。

ヘンリー杉本

和歌山市出身。1919年に両親に呼び寄せられて渡米し、画家として活躍しました。強制収容所に持ち込んだ筆と絵具でシーツをキャンバス代わりに収容所での生活を描いた作品は、その様子を今日に伝える貴重な資料となっています。



昼食前の列
和歌山市民図書館蔵
(ヘンリー杉本氏作)